

|       |             |        |                               |
|-------|-------------|--------|-------------------------------|
| 01    | 名古屋<br>(中川) | 長須賀小学校 | ミズタニ ユウタ<br>-----<br>名前 水谷 勇太 |
| 分科会番号 | 12          | 分科会名   | 自治的諸活動と生活指導<br>(小学校)          |

## 研究題目

課題解決を目指し、自分に合った方法で行動できる児童の育成

## 研究要項

### 1 研究のねらい

私は、課題解決の方法を考え、課題解決に向けて行動できる児童を育てたい。令和5年度子ども家庭庁「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」では、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」と回答した日本の子どもの割合は諸外国と比較して低い傾向が見られた。このことから、未知の課題や困難な課題に挑戦する意識を育むことが重要であるとする。

これまで学級活動(2)において、児童が学級や自己の課題を解決する経験を積めるよう実践を行ってきた。文部科学省国立教育政策研究所発行の『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動』では、「自分に合った具体的な解決方法や目標を意思決定し、自発的・主体的に実行できるよう自己指導能力を育てる」ことが示されている。自己指導能力は、課題解決の方法を意思決定し実践する過程を通して育成され则认为るが、実践の中では、自分の実態に合わない方法を選択し、十分な成果や成長の実感を得られない児童も見られた。

そこで、児童が自分に合った解決方法を選択して取り組めるようにするため、名古屋市の教諭である早川氏が行った平成25年度の実践に着目した。早川氏は、「試し活動」の後に解決方法について話し合う活動を取り入れ、その結果、児童が実現可能な計画を立てられるようになったと報告している。この成果から、学級活動(2)の授業過程である「(課題を)つかむ、(原因を)さぐる、(解決方法を)見つける、(個人の目標を)決める」に「ためす」を位置付けることで、児童は解決方法の実現可能性や効果を具体的に捉え、自分に合った方法を意思決定できるようになると考えた。

以上のことを踏まえ、本研究では「つかむ、さぐる、ためす、見つける、決める」の学習過程を設定し、「ためす」活動の前後で「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」の観点から話し合いを行うことで、児童が自分に合った課題解決方法を意思決定し、行動できるようになることを目指す。

### 【研究の重点】

- 「ためす」活動の前後に、課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を考える活動を設定し、話し合いを通して、課題解決の方法を吟味できるようにする。
- 「ためす」活動において、自身の課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を振り返ることで、主体的に行動し続けることができるようにする。

## 2 研究題目に迫るための具体的な手立て（対象児童：小学校6年生 27名）

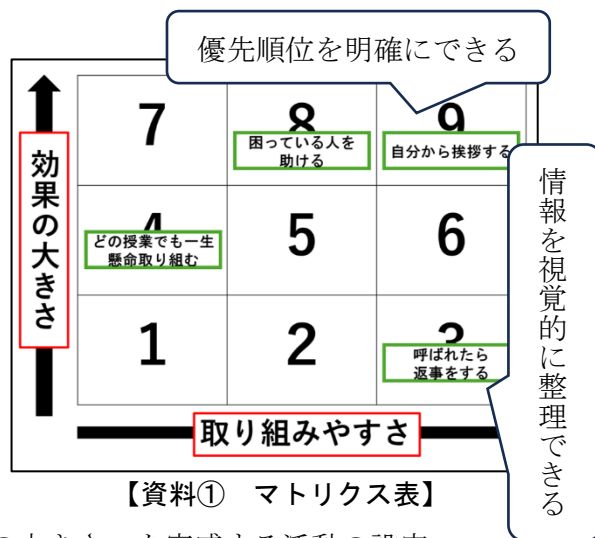
### (1) 課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を考える活動の設定

#### 【マトリクス表の活用（「ためす」活動の前）】

学級における課題を「つかみ」、原因を「さぐる」活動を行った後、マトリクス表を活用した、少人数グループ（4人程度）での話し合いを行う。

一人一人が課題解決に向けての具体的な取組案を付箋紙に書き、2つの観点（取り組みやすさ・効果の大きさ）を考慮してマトリクス表に貼る。

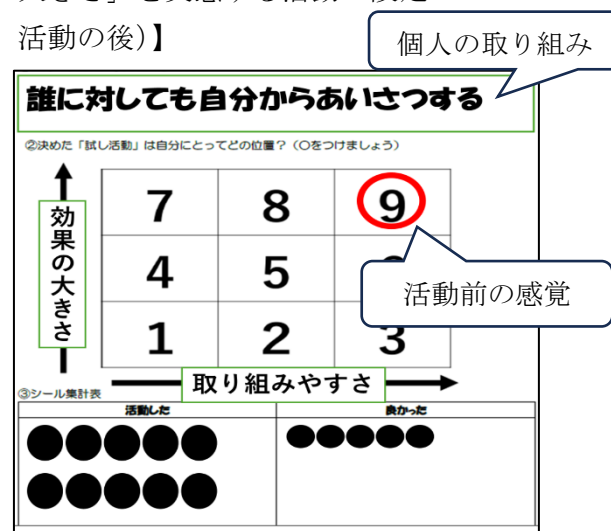
（資料①）その後グループで話し合い、付箋紙を並べ変える。自分の取り組み案について再考したり、他の取り組み案を知ったりすることを通して、「ためす」活動の方向性を決める。



### (2) 課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を実感する活動の設定

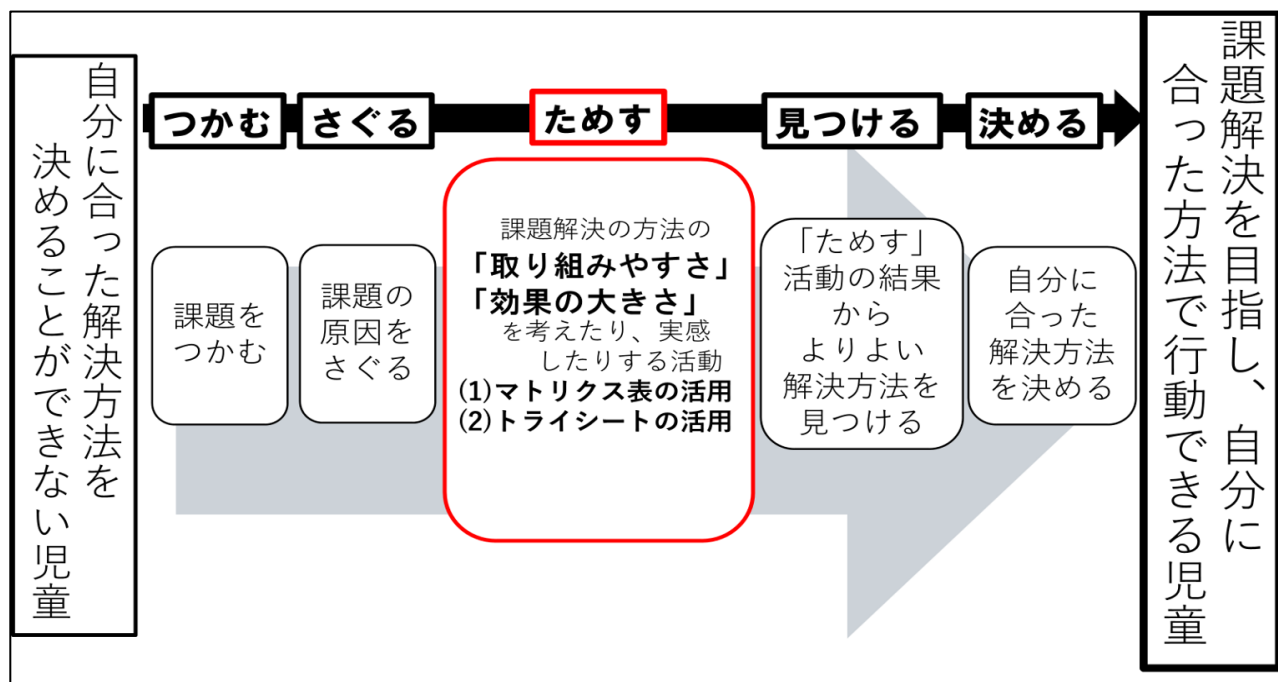
#### 【トライシートの活用（「ためす」活動、「ためす」活動の後）】

「ためす」活動（1週間程度）においては、トライシートを活用する。（資料②）活動に取り組むことができたときや活動して良かったと感じたときに、シールを貼っていく。シールの数から、取り組みやすさや効果の大きさについて視覚的に振り返ることができる。また、自分の取り組みに対する取り組みやすさや効果の大きさについて、活動前の感覚（マトリクス表）と活動後の実感の違いも比べることができる。



## 3 実践の流れ

【資料② トライシート】



## 4 実践内容

実践1 最高学年としてできる事を考えて、課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を話し合おう！

### (1) 実践のねらい

- ・「ためす」活動の前に、課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を考える活動を設定し、話し合いを通して、課題解決の方法を吟味できるようにする。

### (2) 実践の様子

#### 【「つかむ」「さぐる」活動】

6月、「自分たちにとって6年生とはどんな学年なのか」と教師が問い掛けた。すると「最高学年として下級生の手本になれる学年」「憧れられる学年」などの意見が出た。その後「どんな6年生でありたいか」と問い掛けると「最高学年として皆の手本になるべき」「周りから憧れられる存在になりたい」という意見が多数挙がり「頑張りたい気持ちはあるがなかなか行動に移せない」という課題が出た。

次に、小グループで「なぜなかなか行動に移せないのか」という原因をさぐる話し合いを行った。「周りに流されてしまう」「具体的な目標を立てていなかった」など、自分たちの経験をもとに、真剣に考えを深めていった。その結果、互いの意見を聞き合いながら、少しずつ自分たちなりの素直な考えを共有していった。

#### 【「ためす」活動前】

「最高学年として何ができるのか」という視点でグループで話し合いを行った。その結果「教室を移動するときは静かにする」「困っている人がいたら助ける」「誰にでも自分から挨拶をしに行く」など、児童からは具体的な課題解決の方法が出され、課題に対して自分ができる

|          | 取り組みやすさ 1       | 取り組みやすさ 2     | 取り組みやすさ 3       |
|----------|-----------------|---------------|-----------------|
| 効果の大きさ 4 | 教室を移動するときは静かにする | 困っている人がいたら助ける | 誰にでも自分から挨拶をしに行く |
| 効果の大きさ 2 | 教室を移動するときは静かにする | 困っている人がいたら助ける | 誰にでも自分から挨拶をしに行く |
| 効果の大きさ 1 | 教室を移動するときは静かにする | 困っている人がいたら助ける | 誰にでも自分から挨拶をしに行く |

【資料③ マトリクス表】

ことを一人一人が付箋紙に書いた。その後マトリクス表（資料③）を使い、課題解決の方法が9マスのどこに当てはまるのかを決めていった。グループ全員の付箋紙が貼られたマトリクス表を見ながら、「あいさつは、取り組みやすくない？」や「スリッパをそろえるもいいけど、あいさつや教室を移動するときに静かにする方が、効果の大きさは大きそう」などの話し合いが行われた。最後に他グループのマトリクス表も自由に見に行く時間を設けた。同じ方法でも自分のグループとマトリクス表の位置が違うことを見付けたある児童は「なぜ取り組みやすいと思ったの？」と自分とは違う考えを自ら聞こうとする姿が見られた。マトリクス表を使ったり、他グループの表を見に行ったりすることで、課題解決の方法を吟味することができた。

### (3) 成果と課題

- 「マトリクス表」を活用したことで、課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」をより理解できるようになった。
- 自分たちのグループだけでなく、他グループのマトリクス表を見ることで、より「取り組みやすさ」や「効果の大きさ」を吟味することができた。
- 児童によっては、課題解決の方法の「取り組みやすさ」や「効果の大きさ」を自分自身の感覚だけで判断してしまい、十分に吟味しきれない場面が見られた。

実践2 「ためす」活動から「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を振り返り、自分に合った解決方法を意思決定しよう！

### (1) 実践のねらい

- ・ 「ためす」活動の結果から「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」をよりよくする話し合いを行い、児童が自分に合った課題解決方法を意思決定できるようにする。

### (2) 実践の様子

#### 【「ためす」活動】

小グループで話し合っただけ決めた解決方法をトライシート（資料④）に記入し、「ためす」活動を1週間行った。ある児童は「掃除を黙って最後まで丁寧にやる」という活動を設定し、掃除の時間終了後に「いつもより頑張りました！」と報告に来た。その児童は「良かった」の欄にもシールを貼り、行動の成果を感じていた。また、「誰に対しても自分から挨拶をする」という活動を設定した児童は、「他の先生から褒めてもらえました！」と、うれしそうに報告に来て、たくさんの人に自ら挨拶する姿が見られた。「取り組みやすさ」や「効果の大きさ」について自分で決めた解決方法だからこそ、児童は意欲をもって行動に移すことができたようだった。

【資料④】 トライシート

一方、「困っている人が居たら助ける」といった解決方法を設定した児童は「取り組みればとても良い」ということを実感しつつも「機会が無ければ取り組みない」「相手が話し掛けてくれないと意味がない」などの成果を実感できていない児童もいた。（資料⑤）「やってみよう」という前向きな気持ちはあったものの、行動に移すことができず、結果的に「できなかった」で終わってしまったのである。

【資料⑤】 トライシート

#### 【「ためす」活動の振り返り】

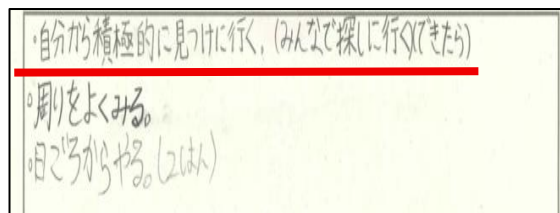
「ためす」活動の解決方法が似ている児童ごとに6つのグループを編成し、グループごとに「ためす」活動の振り返りを行った。初めに「ためす」活動の結果から分かったことを各々報告し合う時間を設けた。まずは「効果の大きさ」に焦点を当てて報告し合った。あるグループでは、「感謝されたことが良かった」「相手がにっこりしていて、自分もうれしい気持ちになった」などの発言が見られた。次に「取り組みやすさ」に焦点を当てて報告し合った。「忘れてしまっていた」という意見だけでなく、「やるチャンスがなかった」「なかなか勇気が出なかった」などの発言が見られた。（資料⑥）

【資料⑥】 トライシート

このように、「ためす」前は、取り組みやすいと思っていた課題解決の方法でも、実際にやってみると難しいと感じている児童が多かった。また、「ためす」活動を実際に行った後に「効果の大きさ」と「取り組みやすさ」の2つに焦点を当てて報告し合ったことで、それぞれの解決方法の良さや課題が明確になった。そして、課題点から「どのような工夫をしたら取り組みやすくなったり、効果の大きさがより大きくなったりするのか」を次回話し合うこととした。

#### 【「パワーアップシート」を活用した話し合い「見つける」活動】

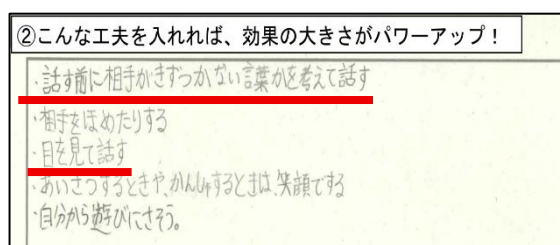
まずは自分たちのグループのパワーアップ案を話し合った。掃除・清掃チームの「取り組みやすさ」をパワーアップする話し合いでは、「ごみを見付けたら拾う。そもそもゴミがなかった。と言っていたけど、ゴミを探していなかったから、1日1回探す時間をつくると良い」や「自分だけじゃなくて周りにもできるように呼び掛ける時間をつくる」（資料⑦）などの案が出た。



【資料⑦ 掃除・清掃チームの記述】

次に、人に優しくするチームの「効果の大きさ」をより高める話し合いでは、「目を見て話す」

「話す前に相手が傷付かない言葉を考えて話す」（資料⑧）などの案が出た。その後、話し合いのグループは変えずに、他のグループのパワーアップ案について考える時間を設けた。自分



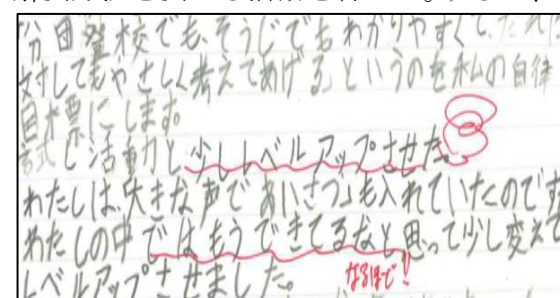
【資料⑧ 人に優しくチームの記述】

以外のグループに対しても「なるほど！確かにこの方法なら取り組む頻度が増えそう」や「この方法を積み重ねていくと最高学年としてよりふさわしい行動につながりそう」などの共感の意見だけでなく「職員室に入るときにもきちんとした挨拶をすると効果の大きさが良くなりそう」といった他のグループの案に対してもパワーアップする話し合いが行われた。その後学級全体で共有し、自分のグループにどのようなパワーアップが追加されたのか、他のグループはどのようなアイデアが出たのかを共有する時間を設けた。

#### 【これまでの話し合いを通して自分に合った目標を意思決定する「決める」活動】

学級全体での話し合いの後、自分に合った課題の解決方法を決める活動を行った。すると、

「自分から先生たちに挨拶をする」を「ためす」活動にしていた児童が「目が合った人に挨拶をする＋自分から掃除のときにゴミを見付けていつも以上に掃除をする」と「ためす」活動からパワーアップさせたり、課題解決の方法を追加したりしていた。学級27人中ほとんど全員が「『ためす』活動よりパワーアップさせた」と記述しており（資料⑨）、中には「『ためす』活動では挨拶にしていたけど、正直挨拶は当たり前のようにできているから、今まで意識していなかった分団登校でも掃除の時でも誰に対しても優しく教えてあげるを課題解決の方法にするとより良くなると思った」といった既にできていることを目標にするのではなく、新たな視点で課題解決の方法を意思決定していった。



【資料⑨ 人に優しくチームの記述】

と記述しており（資料⑨）、中には「『ためす』活動では挨拶にしていたけど、正直挨拶は当たり前のようにできているから、今まで意識していなかった分団登校でも掃除の時でも誰に対しても優しく教えてあげるを課題解決の方法にするとより良くなると思った」といった既にできていることを目標にするのではなく、新たな視点で課題解決の方法を意思決定していった。

### (3) 成果と課題

- 「ためす」活動の結果から振り返りを行ったことで「取り組みやすさ」や「効果の大きさ」がより実感しやすくなった。
- 「ためす」活動を行ってから再度「決める」活動をすることで、具体的な理由を基に明確に立てることができ、行動しやすくなった。
- 他のグループにアドバイスを送る時間をとることがあまり出来ず、他グループから意見をもらえる機会が少なかった。

## 5 研究のまとめ

課題解決を目指し、「ためす」活動を行ったり、「取り組みやすさ」や「効果の大きさ」などについて話し合ったりしてから課題解決の方法を意思決定させた。その結果、事後アンケートでは27人中26人の児童が「自分に合っている方法を決めることができた」と回答した。その理由として「取り組んだ後の達成感があった」(資料⑩)「取り組みやすさや効果の大きさを理解してから決められたので、たくさんできて満足している」といった記述が

やったあとにやったせいでかたも思った。  
いよいよいよいよいよいよ市をみたといいところかたて莫大しい。  
 どうでもよかった。  
 やったよかつた、とちがつこともしたり

【資料⑩ アンケート記述】

やっただとわかってたからかとも思った  
、あつしはうさぎの足で歩いたりをみるというところかとても興味しいけ  
どうでもよかったらいい。  
やっでよかつたものとちがうことむしろ

【資料⑩ アンケート記述】

見られた。本実践では、「ためす」活動を通して課題解決の方法の「取り組みやすさ」と「効果の大きさ」を児童自身が実感・理解した上で話し合いを行い、自分に合った解決方法から行動できるようにすることをねらいとした。児童は、「ためす」活動での実感をもとに課題解決の方法をパワーアップさせたり、新たな課題解決の方法に挑戦したりするなど、当初の計画よりも具体的かつ効果的な課題解決の方法を設定することができた。一方で、本実践を通して以下の2点が課題として明確になった。1点目は、他グループとの意見交換や助言し合う活動の不足である。時間的制約から十分な交流時間が確保できず、多角的な視点から課題解決の方法を高め合ったり深めたりする機会が限定的となった。2点目は行動案への支援不足である。「困っている人を助ける」等の課題解決の方法を設定した児童において、自発的に行動機会を作り出すための工夫や具体的な声掛けの支援が不十分であった。

## 6 今後に向けて

本実践を通して、実践は児童のために行うものであり、児童とともに作り上げていくものであることを改めて実感した。話し合い活動は単に案を「決める」ことが目的（ゴール）ではなく、児童が主体的に行動を起こすための「スタート」であると考えます。今後は、本研究で見えてきた課題を踏まえ、以下の2点に重点を置いて実践を改善していきたい。1点目は、意思決定した課題解決の方法を継続し、成果を実感し合える仕組みづくりである。意思決定した課題解決の方法を長期的かつ主体的に継続させるため、行動の成果や学級への貢献度を相互に認め合える振り返りや評価の活動を充実させていく。2点目は、多様な視点を取り入れる話し合いや、個に応じた支援の工夫である。他グループとの交流時間を業前の「なかよしタイム」等に意図的に確保するとともに、取り組む機会が少ない課題解決の方法を設定した児童に対しても、自発的に取り組めるような工夫や声掛けを行っていく。児童が「自分の行動が学級のためになった」という役立ち感や達成感を味わい、自発的に行動し続けられるよう、学級活動(2)の指導の在り方をさらに追究したい。そして、児童一人一人が自分に合った方法で力強く歩んでいける自己指導能力の育成を目指し、今後も実践に取り組んでいきたい。